日本統治を経験したパラオ人によるパラオ語の片仮名表記

今村　圭介

1．はじめに

戦前日本の委任統治領であったパラオでは、パラオ語を書くために片仮名が使用されていた。日本統治が始まった時点でパラオ語は書記体系を持っていなかったため、片仮名がパラオ語の表記に使用されたのは自然であろう。片仮名は戦前に公学校で日本語を学習したパラオ人によって、手紙などの私的なコミュニケーションで使用されていた。また、現地発刊の日本語の新聞を片仮名表記のパラオ語に翻訳して、配布していたとも聞く[1]。Matsumoto (2001)は1998年に233名のパラオ人に対して、パラオ語表記の使用文字を調査しており、戦前の日本時代に教育を受けた者を中心に、多くのパラオ人が片仮名を使用していたことがわかっている。しかし、これまでパラオ語の片仮名書きの特徴に関する考察は管見の限り行われていないようである。

Matsumoto (2001)の調査では片仮名書きの資料を見ることも多かったようだが、それから15年以上経った現在、片仮名を使用するパラオ人も非常に少なくなくなっている。また、その数少ない片仮名使用者も高齢であるため、片仮名書きの資料を見つけることが難しい。これまでのフィールドワークでも収集を試みているが、実際に見つけることができていない[2]。 そこで、かつて日本時代にパラオ語を書く際に片仮名を使用していたパラオ人に対して、以下の3編の文章を書いてもらった[3]。

a) 日常の日記のような文を片仮名表記のパラオ語で書いてもらったもの
b) インフォーマントになじみのある、アルファベットで書かれた聖書の一節を見せ、片仮名に書き直してもらったもの（図1）[4]
c) また、インフォーマントの知っているパラオの歌の歌詞をアルファベット、および片仮名で書いてもらったもの[5]

---

[1] 筆者はそのような情報を頼りに、多くの人を訪ね周ったが、実際に新聞は見つかっていない。しかし、印刷屋で働いていたパラオ人の孫の情報であるため、間違いではないと考えられる。

[2] 仮名によるパラオ語の手紙を保存している者もいたが、私的な物で恥ずかしいということと、どこに保存されているかわからないという理由で、見せてもらうことができなかった。

[3] インフォーマントは1931年生まれで、ゲサール州出身である。沖縄系の父、パラオ人の母を持つ。日系、沖縄系以外のパラオ人もパラオ語に仮名を使用していることは確認している。

[4] *Chedaol Biblia*, Bible Society of Micronesia, 2004, 2004 Edition の Matteus 18:1-5 （マタイによる福音書18章1-5節）を使用した。聖書の使用はインフォーマントが読みなれている文章であるとともに、オンラインでオーディオデータにアクセスすることができ、音声を容易に確認することができるという利点がある。

[5] a)の日記のような文は、Long & Imamura (2013)に収録されている。c)の歌詞の資料は、沖縄県立芸術大学の小西潤子教授より提供いただいた。ここに感謝申し上げる。

本論はその3編の文章を分析し、パラオ語における片仮名使用の特徴の一端を明らかにすることを目的とする。本調査はパラオ人のインフォーマント一人に対して行った調査であり、調査資料も限られている。また、インフォーマントも述べていたが、パラオ語の片仮名表記に統一した方法があるわけではなかった。しかし、旧植民地（委任統治領）における日本語の影響の記述として、パラオ語の片仮名表記の特徴の一端を記述することは重要であると考えられる。

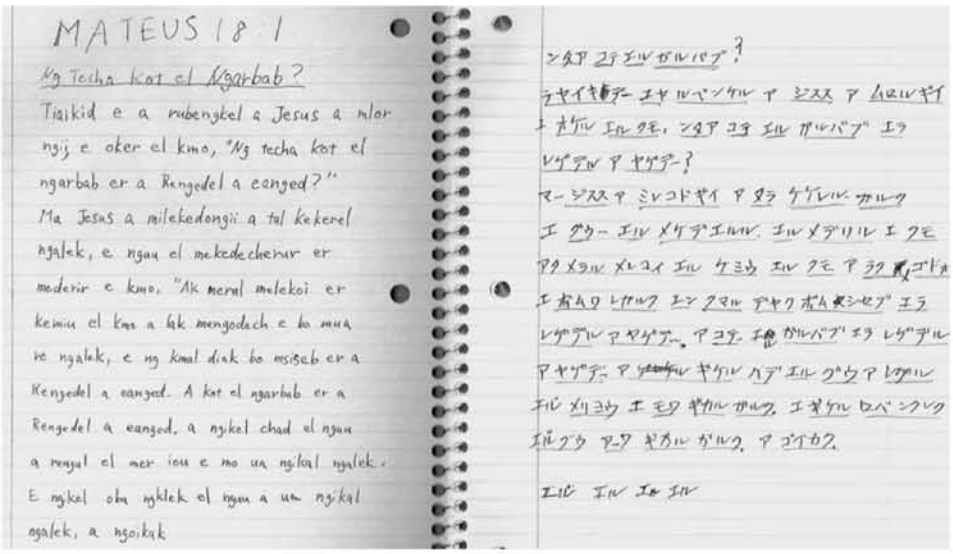

図1 インフォーマントによるパラオ語の片仮名書き資料の一つ[6]

2．旧植民地における片仮名使用

パラオ以外にも旧植民地である台湾、満州で片仮名が使用されていたことが報告されている。日本統治前にすでに書記言語が浸透していた地域であるが、様々な必要性から片仮名が使用されていた。ここでは日本語以外の言語に片仮名が使用されている例について、その特徴も含め先行研究を基にまとめていく。

満州においては、1935年から学校の教科書で、外国の人名、地名、国名、専門用語などの表記に片仮名が使用され、新聞、雑誌、書籍などの出版物にも使用が見られた（石2005）。その後、中国語を片仮名で表記する「満州カナ」が1944年に制定された（桜井2012）。その目的は、字数の多い漢字ではなく片仮名により識字率を向上すること、日本語・日本文化の流入を促進することであったとされる（安田1997）。しかし安田（1997）は、この「満州カナ」は大衆への普及や文書・文学における使用には至らなかったと述べている。また、その片仮名の文字体系については、大衆に向けて

6 インフォーマントが高齢ということもあり、聖書の一説を筆者がノートの左側に大きく書き、右に片仮名による表記をするようにお願いした。

作成されたものであることから、新しい片仮名文字の作成や片仮名の小書きはされなかった（安田1997）。

さらに台湾においては日本語教育を経験したアミ語母語話者によって、アミ語の表記に片仮名が使用されていた（簡2011）。電話番号の控えや、家系図、歌詞のカードなどに使用され、片仮名の表音性を利用し、漢字では表しにくいアミ語を表記していると、簡（2011）は報告している[7]。また、日本人移民が台湾語を学ぶために台湾語の片仮名書きの方法が確立されていた（樋口2012）。日本の台湾統治初期に、言語の相互理解がないことによる困難を解決するために、現地人に対する日本語教育に加え、日本人に対する台湾語を教育する方針があったためである（林2008）。その特徴は林（2008）の記述を基に、以下のようにまとめられる[8]。

① 新規作成の片仮名（ㄘ、ㄙ、ㄛ、ㄝ、ㄟ ）[9]
② 閉音節の表記（[n]＝ヌ、[m]＝ ム、[ŋ]＝ン、[p]＝プ、[t]＝ツ、[k]＝ク）
③ 母音の表記（[o]＝ オ、[ɔ]＝ヲ）
④ 出気音符号、八声符号の使用
⑤ 語末に来る声門閉鎖音の前の母音を小書きする

パラオにおいてはパラオ語の片仮名書きが推奨されたこともなく、政策的に片仮名表記が作られることはなかった[10]。しかし、日本統治以前にほとんど書き言葉が使われていなかったため、日本語と片仮名を覚えたパラオ人がパラオ語に片仮名を使用し始めた。また、海軍に勤めた後、ミクロネシアのいくつかの言語について著作を残している松岡静雄が文法の研究書を出しており、その中でパラオ語の全ての語を片仮名表記している（松岡1930）。この研究書が民間人の目に触れることは少なかったため、本の片仮名表記体系はパラオ人の片仮名表記に全く影響しなかったと考えられる。しかし、日本人の学者が考案したパラオ語の片仮名表記と、パラオ人の間で自然発生したパラオ語の片仮名表記にどのような相違が見られるかを比較考察することで、それぞれの特徴が浮き彫りになると考えられる。その点に関しても、後に考察していく。

３．パラオ語の片仮名表記の特徴

パラオ語と日本語は当然異なる音韻体系を持つため、書き表すパラオ語の音や音節構造に対して、対応する完全に対応する仮名がない場合がある。その場合は、インフォーマントが独自のルールを作るとともに、場合によっては表記に揺れが見られるようである。以下では次の特徴、中舌母音[ə]、閉音節、二重母音・長音・促音、その他

---

7 漢字にも表音性は認められると考えられるが、画数の少ない片仮名の使用が好まれたのであろう。
8 （泉州方言の）方言的な母音を現すために、「ㄎ ㄔ」も使用されたようである（林2008）。
9 ㄘ、ㄙ、ㄛ、ㄝ、ㄟ はそれぞれ、/tsa/, /tse/, /tso/, /ti/, /tɯ/ を表す。
10 そうした施策の動きが全くなかったかどうかは分からないが、少なくとも記録は見つかっておらず、そうしたことがあったという話も聞いていない。

日本語にない音素（/ŋ/ , /ʔ/, /l/と/r/)の表記を詳細に分析していく。

3. 1. 中舌母音

パラオ語の母音体系は図2（Josephs (1990)を参考に作成）のように6母音である。中舌母音ęはアクセントが置かれない音節のみに現れるため、ミニマルペアを見つけることは難しい（Josephs 1975）。また、語の変化形から母音弱化が起こった結果、中舌母音が現れると考えられる場合もある（Josephs 1975）。例えばパラオ語で所有格を表す場合には名詞に所有を表す形態素が付加するとともにアクセントがその形態素に移動し、元の語の母音に母音弱化が起こる。Josephs (1975:20-21)の例、*bsibs* 'drill' → *bsębsék* 'my drill', *chur* 'laughter', → *chęrík* 'my laughter' , *sers* 'garden' → *sęrsék* 'my garden', *ngor* 'mouth' → *ngęrék* 'my mouth', *kar* 'medicine' → *kęrúk* 'my medicine'、に見られるように、中舌母音以外の5母音全てで母音弱化が起こる。

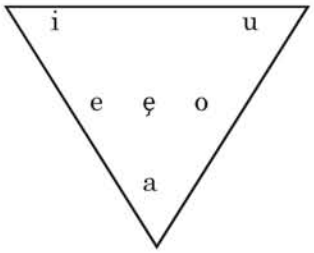

図 2 パラオ語の母音体系

このようなパラオ語の6母音体系の特徴はパラオ語の片仮名表記にも多少の影響を及ぼしていると考えられる。文章の中に現れた中舌母音を含む単語の一部とその表記を以下の表2にまとめた[11]。ほとんどの中舌母音はエ段の仮名で表記される。アルファベット表記eに引きずられていることは否定できないが、エ段以外の仮名が使用されている語もある（表1の網掛け）。アルファベット表記によって中舌母音の表記が決まるのであれば、全ての中舌母音にエ段の仮名が使用されることになる。つまり、エ段の仮名で表記される中舌母音は、エ段音に近い音として知覚されていると考えたほうが自然であろう。声門閉鎖音の前の中舌母音で仮名使用が変わる例が2例見られた。*techa*, *mengodech*, の中舌母音にそれぞれア段とオ段の仮名が使用されている。*techa*では後ろに来る/a/、*mengodech*の二つ目の中舌母音の表記は前に来る/o/に

表 1　中舌母音を含む語の表記

語	片仮名表記	発音記号
techa	タア	təʔa
rubengkel	ルベンケル	rubəŋkɛl
rengedel	レゲデル	rəŋədɛl
eanged	ヤゲデー	jaŋəð
kekerel	ケケレル	kɛkərɛl
ngalek	ガルク	ŋalək
mekedecherur	メケデエルル	məkɛdɛʔɛrur
mederir	メデリル	məðərir
meral	メラル	məral
melekoi	メレコイ	mələkoy
kemiu	ケミウ	kəmiu
mengodech	メゴドォ	məŋoðəʔ
rengul	レグル	rəŋul
chelid	エリデ	ʔəlid

[11] 使用した聖書は単語の綴りが現在のものと異なるものが見られる。その点から現行使用されている（いまだに統一が完全に行われていない）正書法が使われていないことが分かる。*milekedongii*は綴りを見て中舌母音が含まれると考えられたが、辞書に記載があったのは*milkodongii*である。音声データから発音も後者の綴りに近いことが確認された。

影響されていると考えられる。ただし*ngalek*の中舌母音はウ段の仮名で表記されており、前後の音環境のみで片仮名表記が決定するわけではない。中舌母音の表記はエ段の仮名での表記を基本とし、どの段の仮名も使用される可能性があると指摘できる。

3.2 閉音節

パラオ語の閉音節を片仮名で書き表す場合は、ウ段の仮名で書き表すことが多い（[ŋ]はン）。語中の閉音節は例外なくウ段の仮名が使用される。閉音節で終わる単語の後に母音で始まる単語がある場合は双方が影響し合い、表記が決定される場合もある。閉音節で終わる語が後続母音に影響される例として *mer iou* が見られる。逆に母音で始まる語が先行子音に影響される例は ngikel oba である。

tiakid e a, *kot el*, *chad el* には、全てエ段の仮名「テ、デ」が使用される。また、閉音節で終わり母音が後続していない *eanged* の最後の閉音節も、「デ」で書き表す。この点に関しては後に考察する。またその他例外として、*a tal* は「ア タラ」と表記され、ア段の仮名が使用される。この点も今後原因を突き詰める必要がある。

表 2 閉音節の片仮名表記

tiaikid e a	テアイキデ　エヤ
mlor ngii	ムロル　ギイ
oker el kmo	オケル　エル　クモ
kot el	コテ エル
ngarbab	ガルバブ
eanged	ヤゲデー
a tal kekerel	ア　タラ　ケケレル
mederir	メデリル
ak meral	アク　メラル
msiseb	ムシセブ
chad el	ハデ　エル
mer iou	メリ　ヨウ
ngikel oba	ギケル　ロバ
ngklek	ンクレク
medousubes a mle	メドウスベス　アムレ

3.3. 二重母音・長音・促音

次にパラオ語の二重母音・長音・促音がどのように片仮名で書き表されるかを考察する[12]。まず、パラオ語の現行の正書法では y, w は認められていないが、[j]、[w]の音は現れる。その場合にはヤ行、ワ行が使用される（*eanged* ヤガデ ／*mua* ムワ／*iou* ヨウ ／*mo ua* モワ ／*ua* ワ）[13]。また[j]、[w]が現れるとされる二重母音を含む語にもヤ・ヨ・ワが使用されている（*e a* エヤ／ *tiaikid* テヤイキデ／*diak*[diak] デヤク）。実際はどの語句で二重母音の一つが半母音として発音されるかは予想が難しいが（Josephs1975）[14]、インフォーマントは全ての半母音が起こりうる語句にヤ・ヨ・ワ

[12] なお、当時の公学校における日本語教科書『國語讀本』では、促音はツの小書き「ッ」が使用されており、長音記号「ー」は外国の地名（ニューギニア、マーシャル）などにのみ使用されている。

[13] 現行の正書法が使われる前までは、y, w は使用されており、使用を再開する検討もされている。

[14] Given only the Palauan spelling of words contacting vowel clusters, it is very difficult to predict the correct pronunciation. This is because some of the (spelled) vowels are pronounced in different

を使用している。少なくともインフォーマントにはそう知覚され、ヤ行・ワ行の仮名が使用されるのであろう。なお、使用されるワ行の仮名は、旧仮名遣いのヲ、ヰも含まれる（*uo* ヲ／*uoi* ヲイ／*wil* ヰル）[15]。

パラオ語の母音は e, i, o, u に長母音が存在する。音声学的には短母音よりも長いが、母音にわたり音（前舌母音は[j]、後舌母音は[w]）が続く形で発音される(Josephs1990:xlii)。表 3 のように、文中に現れた数少ない長母音のほとんどがア行の仮名で表記される。長母音に長音記号が使用された例は二例（*elii* エリー、*nguu* グウー）である。前者はア行の仮名（「イ」）なしで、後者はア行の仮名（「ウ」）に加えて長音記号が使用される。インフォーマントの長音記号の使用にはゆれがあると言える。なお、長母音以外にも長音記号のようなものの使用も見られたが、インフォーマントによると、「つながっていることを示す」記号であるという。パラオ語では確かに閉音節で終わる語に母音で始まる機能語をつなげて発音することが多く見られる。しかし、文末にも長音記号に似たもの「ー」が使用されている例が見られる（*... eanged?* ヤゲデー）。語は子音[ð]で終わるため、なぜこのように記号が使用されるかは現時点では不明である[16]。しかし、長音記号がパラオ語の長母音を示すために使用されていないことは確かである。

表 3　長音記号の使用

使用例	長母音への記号の不使用
elii エリー	*meluluut* メルルウト
kot el コテーエル	*ikrii* イクリイ
eanged ヤガデー	*milekedongii,* ミレコドンギイ
nguu グウー	*nguu* グウ
ma Jesus マージスス	*muus* ムウス
a ua アーワ	*luut* ルウテ

促音はフィリッピン *Philippine*、マキット *makit*、ラックト *rakt* のみに使用される。フィリッピンは固有名詞であるが、『南洋群島國語讀本』での表記は同じく「フィリッピン」である。*makit*（アクセントは i）は英語の market からパラオ語に入った外来語である。*makit*、*rakt* は両方、（強弱）アクセントが置かれる位置に促音記号が挿入されている。例が二つのみであるため推測の域を出ないが、促音表記をする理由としては、

---

ways, depending on whether or not they are stressed and whether they precede or follow the adjacent vowel (Josephs 1975:24).

[15] 歌詞の中に使用されている *wil* は人名である。また *uoi* はインフォーマントは *ui* と表記している。近年確立されたパラオ語の正書法とインフォーマントが学習した書き方の違いであると思われる。w, y は古い慣習では使用されていたが、正書法では使用が廃止された。

[16] インフォーマントに追加の聞き取り調査を行ったところ、「書かなくてもいい」「消してもいい」といった返答があったため、個人の中で長音記号の使用に揺れがあると考えられた。

インフォーマントが日本語の外来語への促音挿入の規則を無意識的に学習し、パラオ語の仮名表記に応用した可能性がある[17]。今後促音表記がされる可能性のある語の片仮名表記を調査することで、規則性が明らかになると考えられる。

3.4. その他日本語に見られない音素と音節構造

パラオ語には/l/と/r/の対立があるが日本語にはないため、仮名でそれを表すことができない。パラオ語ではそれが時に意味理解に問題をきたす可能性があるため、インフォーマントは書き分けの方法があると述べていた。ただし、常に書き分けるわけではなく、混乱をきたす可能性があると感じられる場合だけ書き分けられ、そうでない場合は、読み手の理解に任せるそうである。文中にもミニマルペアとなる語 *el* と *er* が見られる。書き分けは/r/の場合は通常のラ行の仮名を使用し、/l/の場合に濁点「゛」に似たマークをつけるか、小書きをするようである。この書き分けは本調査のインフォーマントの方法であり、決して共通した書き分けではないと述べていた。

パラオ語には音素/ng/があるが、/n/, /g/は存在しない（/ng/の異音として[n]が、/k/の異音として[g]は見られる）[18]。/ng/が閉音節を構成する場合は「ン」、開音節の場合はガ行の仮名が使用される（表4）。この規則には例外が見られないようであった。

表4　音素/ng/の表記

閉音節	開音節
ng ン	*milekedongii* ミレコドンギイ
rubengkel ルベンケル	*ngalek* ガレク
meng メン	*rengedel* レゲデル

声門閉鎖音は、音環境によって異なる表記がされるようである。まず *chad* [ʔað]に「ハ」が、chuarm [ʔwarm]に「フ」使用される例が見られた[19]。その他の音環境では母音のみでア行の仮名が使用される（*chemutii* エムテイ／*techa* タア）。つまり、声門閉鎖音が語頭に来るかどうかや、調音点（日本語の「は、へ、ほ」は声門摩擦音[h]）が同じかどう、は関係しないようである。これもインフォーマントの知覚でもっとも近いと考えられた片仮名表記がされているのであろう。なお、語末に声門閉鎖音が来る場合はまた別の表記がされる（*mengodech*・メゴドォ）。オの小書きは、おそらく声門閉鎖音が存在することを示しており、母音で終わる語でないことを示していると考えられる。語末の声門閉鎖音は他の単語がなかったため推測になるが、声門閉鎖音の前の母音に応じて、同様にア段の仮名が使われるのでないかと思われる。

---

17 外来語の表記での促音挿入は、hip（ヒップ）、bridge（ブリッジ）のように、単母音の後に破裂音・破擦音が来る場合などに観察される（小野 1997）。

18 異音は分析に特に関係しなかった。

19 パラオ語の声門閉鎖音は ch で表記される。

パラオ語の音節構造には、日本語にはない/ti/、/tu/、/di/、/du/が存在する。/ti/、/di/はそれぞれテ、デで表記される（*tiaikid* テヤイキデ、edi エデ）。/tu/、/du/は用例がなかった。おそらくト、ドで表記されるのではないかと推測される。チ、ツは日本語からの外来語に使用されるため、「チ、ツ、ヂ、ヅ」はタ・ダ行の他の音（[t], [d]）と異なることを認識し、使用を回避していると考えられる。

4．研究書に見る片仮名表記との比較

ここでは、以上で考察したインフォーマントのパラオ語における片仮名使用をまとめ、前述の研究書、松岡（1930）『パラウ語の研究』における片仮名表記との比較考察を行う。松岡（1930）の片仮名表記は表 5 に、インフォーマントの片仮名表記は表 6 に、まとめられる。松岡（1930）は研究書であることから、パラオ語の記述のための手段として片仮名でパラオ語を表記している。目的が異なるため、表記の体系が異なるのは当然だが、それぞれの音の知覚が如実に表記の違いに現れていると言える。以下相違点について記述する。

表 5　松岡（1930）におけるパラオ語の片仮名表記

他	[p]	[b] *2	[ʔ][x]*3	[d] *2	[ng]	[r][l]	[m]	[t]	[s]	[g] *2	[k]	-	*1
ー	パ	バ	カ゜	ダ	ナ	ラ	マ	タ	サ	ガ	カ	ア	[a]
ウ	ピ	ビ	キ゜	ヂ	ニ	リ	ミ	チ	シ	ギ	キ	イ	[i]
ヌ	プ	ブ	ク゜	ヅ	ヌ	ル	ム	ツ	ス	グ	ク	ウ	[u]
*5	ペ	ベ	ケ゜	デ	ネ	レ	メ	テ	セ	ゲ	ケ	エ	[e]
	ポ	ボ	コ゜	ド	ノ	ロ	モ	ト	ソ	ゴ	コ	オ	[o]
	-	ブ	ク゜	デ	ン	ル	ム	テ	ス	ゲ	ク	ウ	-

*1 中舌母音を音素として認めていない。

*2 [g], [d], [p]は異音として発生したものであると捉えている[20]。

*3 声門閉鎖音は、[x]に近い音で発音される場合もあると述べている[21]。

*4 外来語の表記に関しては特に記述がない。

*5 [k], [t], [d]の後にヌが加えられることがある。

---

20 「濁音ガ行、ダ行及パ行は本來音便として發生したもので、カ行、タ行、バ行との間に本質的な區別はない」（松岡 1930:13）

21 「カ行には清濁二音の外に喉音がある、即ち kh を子音とするもので、k が強く響く場合にはカ行に聞こえるが、h 子音が勝つとア行に近くなる」（松岡 1930:10）。これに関して McManus (1968:2) は年配の話者(older people)の間では[x] に近い音であると考察している（“some older people pronounce this as a harsh guttural somewhat like the German ch or Spanish j. ”）。

表 6　本調査のインフォーマントによるパラオ語の片仮名表記

[ng]	[w]	[r]	[l]	[j]	[m]	[t]	[s]	[k][g]	-	
ガ	ワ	ラ		ヤ	マ	タ	サ	カ	ア	[a]
ギ	ヰ	リ		-	ミ	テ	シ	キ	イ	[i]
グ	-	ル		ユ	ム	ト	ス	ク	ウ	[u]
ゲ	ヱ	レ		-	メ	テ	セ	ケ	エ	[ɛ]
ゴ	ヲ	ロ		ヨ	モ	ト	ソ	コ	オ	[o]
ゲ	-	レ		-	メ	テ	セ	ケ	エ	[ə] *1
ン	ウ	ル	ル ルゞ ル	イ	ム	ト*5	ス	ク	ウ	-*2

他*4	[n]*3	[ts]*3	[z]*3	[p]*3	[h] *3	[b]	[ʔ]	[d]	
ッ	ナ	-	ザ	パ	ハ	バ	ア ハ	ダ	[a]
ー	ニ	チ	ジ	ピ	ヒ	ビ	イ	デ	[i]
	ヌ	ツ	ズ	プ	フ	ブ	ウ フ	ド	[u]
	ネ	-	ゼ	ペ	ヘ	ベ	エ	デ	[ɛ]
	ノ	-	ゾ	ポ	ホ	ボ	オ	ド	[o]
	-	-	-	-	-	ベ	-	デ	[ə]
	ン	-	-	-	-	ブ	*6	デ	-

*1 中舌母音は基本的にエ段の仮名で表記されるが例外も見られる。
*2 閉音節は後続の語が母音で始まる場合はそれに影響される場合もある。
*3 [h], [p], [z], [ts], [n]は日本語の外来語に使用される。
*4 促音「ッ」長音「ー」の使用規則は定かでない。
*5 一例のみ「ト」と小書きが見られた。
*6 語末の声門閉鎖音は前の母音の小書きで表記される。

まず、[k], [g]の表記に相違が見られる。本調査のインフォーマントは[k], [g]は/k/の異音であることから、同じ音として知覚し、全てカ行の仮名で書き表している。日本語にその音韻的違いがあることから、松岡は異音であると認めながら、カ行とガ行の仮名で書き分けをしている。[p], [b]の表記にも同様の点が見られる（ただしインフォーマントは日本語借用語にはパ行の仮名を使用する）。

松岡は異音の[g]にガ行の仮名を使用しているため、[ng]にナ行の仮名を使用するに至っている。松岡はその理由として、先行研究で n と表記されていること、音素/n/がないことなどを挙げている。その上で松岡が『ミクロネシア語の綜合研究』でミクロネシア他言語の音素/ng/の表記に、ナ行の仮名のゴシック体を使用している例に従わないとしている。

[ti], [tu], [di], [du]には、松岡は日本語借用語を除いた純粋なパラオ語の表記を考えて

いないため、チ、ツ、ヂ、ヅを使用している。しかしインフォーマントは日本語借用語の音との違いを考えているため、テ、ト、デ、ドを使用するに至っている。

[l], [r]は、松岡はそれが音韻的に区別されると考えていないため、書き分けの方法を考えていない。インフォーマントはその点、意味的な混乱が起こる *er* と *el* の書き分けをしている。[j], [w]も松岡は音素として認めていないためヤ行、ワ行の仮名は使用していない。現行の正書法の元となった Josephs(1975, 1990)も音素と認めていないが、インフォーマントは違いを知覚し、ヤ行、ワ行の仮名を使用している[22]。

長音記号の使用には類似点が見られる。松岡もパラオ語の長母音は母音の持続時間が長いと知覚しておらず、むしろ二つの母音が分かれて発音されると知覚している。o の長母音のみは長母音として知覚し、長音記号を使用している。データからはインフォーマントが o の長母音に同じように長音記号を使用するかは分からなかったが、他の長母音に長音記号を使用していないことは共通している。

中舌母音の表記は共通点が見られ非常に興味深い。インフォーマントがエ段以外の仮名を使った語の表記が松岡にも共通している。*ngalek*、*techa*,はインフォーマントはガルク、タア、松岡はナルク、タカ゛であり、中舌母音の表記が共通している[23]。なお、松岡はゥ、ヌが音素としてではなく、音として現れる場合に表記するようである。

5．まとめ

以上、少ない資料を基にして、戦前日本語教育を経験したパラオ人による、パラオ語の片仮名表記の特徴を考察した。考察は以下のようにまとめられる。①6 母音体系を持つパラオ語の中舌母音は、エ段の仮名による表記が主だが、前後の母音など音韻環境により他の段の仮名表記も見られる。②閉音節の表記はウ段の仮名、もしくは後続の母音に影響されエ段の仮名の使用が主だが、例外も見られる。③一部の二重母音の表記にはヤ行・ワ行が使用される。④長音記号の使用は少なく現時点で不可解な点も見られる。⑤パラオ語は促音に相当するものを持たないが、一部の単語に「ッ」が使用される。⑥側音/l/とふるえ音/r/の区別は、誤解が生じる可能性の判断により a)書き分けない、b)側音の場合に濁点「゛」をつける、c)側音の場合に小書きをする、のいずれかが選択される。⑦/ng/は閉音節で「ン」、開音節で母音とともにガ行の仮名が使用される。⑧声門閉鎖音は、基本的には後続の母音のみで仮名表記がされるが、語頭で「ハ」「フ」が使用される例、語末で前の母音の仮名を小書きする例が見られた。

今後、追加調査を行うこと、別のインフォーマントに調査を依頼すること、また片仮名書きのパラオ語の資料を見つけることができれば、さらに詳細な規則の記述を可能にできると考えられる。今後の課題としたい。

---

22 現行の正書法の前の y, w の使用が影響したのかもしれないが、この点は興味深い。ヤ行、ワ行の仮名使用の結果は正書法における y, w の使用の正当性を支持することになる。

23 母音の中でも他の 5 母音の一つに近いものがあるのか現時点では正確なことが分からない。なお。先に述べた Josephs(1990) の説明にある母音弱化の例では、松岡は中舌母音をエ段で知覚するようである。

謝辞

本研究は日本語学会 2016 年秋季大会における発表に加筆・修正を加えたものである。発表当日に有益なコメントを下さった皆様にお礼を申し上げる。また、本研究は JSPS 科研費　研究活動スタート支援 00732679「ミクロネシア地域における日本語借用語の流入・変容・衰退に関する歴史社会言語学的研究」基盤研究(B) 15H05158「太平洋諸語日本語起源借用語逆引き辞典を作成するための現地調査研究」の助成を受けたものである。

参考文献

小野浩司（1997）「外来語の促音化について—小野(1991)・川越(1995)を中心に—」『佐賀大学文化教育 学部研究論文集』2(1):215-226

簡月真（2011）『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランカとしての姿—』明治書院

桜井隆（2012）「満州ピジン中国語と協和語」『明海日本語』17:1-15 明海大学

樋口靖（2012）「領台初期の台湾語教学（一）」『文学部紀要』25(2): 23-40 文教大学

松岡静雄（1930）『パラウ語の研究』郷土研究社

宮脇弘幸（監修）(2006)『南洋群島國語讀本』大空社

安田敏朗（1997）『帝国日本の言語編制』世織書房

林美秀（2008）「日本統治時代における台湾語仮名表記の変化過程—「オ」「ヲ」表記の分析を通して—」『岡山大学大学院社会文化科学研究化紀要』25:77-92 岡山大学

ロング・ダニエル、斎藤敬太、Tmodrang Masaharu（2015）「パラオ語で使われている日本語起源借用語」『人文学報』503:61-84 首都大学東京

Joseph, Lewis S (1975) *Palauan Reference Grammar*, The University Press of Hawaii

Joseph, Lewis S (1990) *New Palauan-English Dictionary*, University of Hawaii Press

Long, Daniel, Keisuke Imamura (2013) *The Japanese Language in Palau* 国立国語研究所 Online at: http://www.ninjal.ac.jp/research/project/a/creole/ files/creole_Palau.pdf

McManus, Padre (1968) "Grammar and Dictionary, Palau-English English-Palau, retrieved at http://tekinged.com/misc/pdf.php?file=68mcmanus (access 2017/1/27)

Matsumoto, Kazuko (2001) Multilingualism in Palau: Language Contact with Japanese and English, in McAuley, T.E. (ed.) *Language Change in East Asia*, Curzon Press, pp. 87-143

（いまむら　けいすけ・東京医科歯科大学）